

平成15年第8回文化学術講演会 講演要録

棟方志功の真実

祖父棟方志功を語る

棟方版画美術館学芸員 石井 頼子

(司会) ただ今より第8回公開文化学術講演会を開催いたします。この会は星稜女子短大の経営学会というものが運営しておりますので、経営学会の会長である山崎学長よりまずご挨拶を申し上げます。

(山崎学長) 皆さんおはようございます。星稜女子短大の文化学術講演会、これは公開で行なわれており、既に歴史があります。この講演会は地域の皆様にも呼びかけまして、今までにいろいろなことを企画してきましたが、星稜女子短大の学生も聞いております。これまでにいろいろな先生方をお迎えした後の反響も大きかったのですが、今日は石井頼子先生をお迎えしました。石井先生は世界的に有名な板画家である棟方志功のお孫さんです。そして私はその棟方志功の書かれた文章にずいぶん若い頃に圧倒されました。こういう小さな書物ですが、一生涯影響を受けるような、すばらしい本です。『板極道』という題のこの本を読みますと日本語の素晴らしさにも気づきます。どうぞ学生の皆さん、書店へ行きましたらこういう書物があることを記憶にとどめておいて、また読む機会を作ってください。

今日は本学の経営学会の運営委員長であります、同じ慶応大学ご出身の水谷教授から講師の先生をご紹介します。

地域の皆様本当によろそおいでくださいました。ありがとうございます。

そして石井先生、本日はお寒い中を遠いところからおいでくださりまして、本当にありがとうございます。

(司会) ほとんど学長が先生のことをご説明いただきましたので、私からは簡単に申し上げます。石井頼子さんのお仕事は学芸員というお仕事で、棟方板画美術館の学芸員をなさっていらっしゃいます。

実は18年ぐらい前に、私はゼミ旅行で横浜、鎌倉の方に行きました。その時私は、確かこの美術館、棟方板画美術館に行ったと思うのです。入りまして受付がすぐ右にありまして、そこから階段があって、階段のところに、今日掛かっているこの十大弟子の板画があったような記憶をパツと思い出しました。とても懐かしく思い出しております。

それでここにいらっしゃる皆さんは、棟方志功のことをご存知ですが、1年生はたぶん知らないだろうと思います。棟方志功という方は、これから石井頼子さんがご説明なさると思うのですが、金沢よりもずっと田舎の青森の生まれです。しかしこんな地方でもこれが世界に通じてしまうような美を作られた方なのですね。そういう意味でも皆さんは、金沢からでも世界に通用するよというようなものをきっとここで何かつかんでいていただきたいと思います。

その棟方志功さんは、今年で生誕100年です。生誕100年を記念してこの4月から宮城県立美術館を始め、全国を記念展が回り、今は渋谷の文化村でやっているといます。そして石井さんは今年だけで8回の講演を棟方志功に関してなさっているそうです。しかし金沢、石川県では1つもそういう行事はやりませんでした。ですから今日これから、こうい

うことはおそらく最初で最後の棟方に関するお話だろうと思うので、そういう意味でも貴重だなと思います。

そして先ほど学長からご紹介がありましたように、石井頼子さんは棟方さんのお孫さんです。昨日NHKをご覧になった方はいますか。テレビで石井さんが、棟方志功と一緒にデッサンの旅行に同行している、そういう写真も放映されました。ですから非常に身近な内側からの棟方志功さんを、今日お話ししていただけるのではないかと思います。そういう意味ではとても相応しい方を今日はお招きしたのではないかと思います。

私は今からどんなお話が伺えるのか楽しみです。学生の方々もおそらくこういう機会はあまりないと思いますので、ぜひぜひ楽しんでお話しを伺ってください。では石井頼子さんお願いいたします。

(石井) ご紹介に預かりました石井です。どうぞよろしくお願いいたします。今水谷先生からもお話がありましたが、今年は棟方志功生誕100年ということで様々なイベントが行われていますので、時に棟方の作品が皆様のお目に留まることではないかと思うのですが、この中で棟方志功を知っているという方、手を上げていただけますか。…やはり学生さんはあまりご存知ないみたいですね。私はそのことにとても新鮮な喜びを覚えます。というのは、今までお話をしていた所では、常に棟方志功という人が皆様の頭の中にある状態だったのです。棟方というと、ものすごく情熱家で、目が近くて、そして女の人の顔、裸の女人像、仏様というイメージが先行している作家なのですが、皆さんはまっさらな状態で棟方志功を見て下さるということで、そういうことは今までになかった事なので、とてもうれしいです。

というのは、いろいろな既成観念で棟方を捉えるのではなく、実際の棟方という人はどのような人だったかということ、これから先、21世紀に語り継いでいきたいというのが私の夢であり、望みなのです。そのために何度も何度も口を酸っぱくして、「このようなうに言われているけれども、実はこうだった」というふうに今までは話していたのです。今日はその部分もありますけれども、棟方はこういう人だったと、初めの一步からお話をさせていただこうと、この場で話の進行を変えることにしました。どうぞよろしくお願いいたします。

私は孫ということで、おじいちゃんとしての棟方志功を語って欲しいとよく言われるのですが、実際におじいちゃんというイメージは全くないのです。いわゆるおじいちゃんというイメージではなく、家中、皆が、いかに彼がたくさんの時間を絵を描くために使うことができるか、ということに心を砕いた家に育ちましたので、棟方志功さんというよりはやはりおじいちゃんではなく、芸術家、そして絵描きさん、一人の板画家というイメージの方が強いのです。

そういう目で見ても、また今は学芸員という立場で、棟方を研究しているのですが、実際

のことはやはり棟方の姿を見ていただくのが一番わかりやすいのではないかと思います。いくらしゃべっても分かりませんから。今回持ってきましたフィルムは「彫る－棟方志功の世界」でございます。棟方は今から28年前の昭和50年に亡くなっていますが、このフィルムは49年に撮影されたもので、最晩年の棟方志功の姿を非常によく捉えています。棟方は亡くなる少し前に病院から許可を得て試写会を見に行きましたが、これが最後の外出となりました。昭和50年の芸術祭大賞、それから同じ年のベネチア映画祭の記録映像部門で金賞をとっています。たけしさんの映画がベネチアで賞を取ったと話題になっていますが、この映画もベネチアで評価された優秀な作品です。映画で、どんな作品があったか、それから棟方という人はどんな人かというのを、まず見ていただきたいと思います。

お手元にお配りしました資料ですが、1枚目はちょっとややこしいことが書いてありますが、2枚目と3枚目に棟方志功の言葉というのがあります。私は棟方と都合10年ぐらいは一緒に暮らしていますし、ずいぶん長いこと一緒に過ごしていますから、彼のしゃべっている言葉を標準語だと思っていたのです。ところが、映画を見た方々が、棟方の言葉をほとんど分かっていなかったということに最近になって気が付きまして、一応テロップがわりに棟方志功さんの言葉を書き抜いてきました。映画の途中では読めないかもしれませんが、お帰りになりましてからでも、参考にしていただけたらと思います。

では映画の方をご覧下さい。

(映画を見ている)

(石井) 印象的なのは、早回しのように見えるあの絵を描く速度だと思うのですが、あれは実際に本当にあの速度で、だいたい60cm四方ぐらいの板木を彫るのに、1時間かかるかかからないかだと思うのです。とにかく作業は非常に早い人でした。油絵ですと、スケッチ旅行にいきまして、4号から6号ぐらいの絵を描くのに、構図を決めて描き出したらば、10分ぐらいでざっとのところは描いてしまいます。後で手をちょっと加えますけれども、それでも仕上げまでにそんなに時間は掛からない、非常に早い人でした。

よく彼は、「早く描かないと絵が逃げる」と言います。とても目が悪いですから、普通にお話しをしても、ほとんど何も見えていないのです。ここから一番前の距離の方とお話しするにも、双眼鏡がなければ顔が見えないような人でした。ですからスケッチに行っても、双眼鏡でもって景色を見ていて「ンッ、ここだ」と言うと、決めた途端に描きたい、描きたい、描きたいという状態になってしまっていて、とにかく「早く、早く」というのです。目に焼きついたものが、逃げない内に早くそれを絵にしたい、画像にしたいというところがあったのだと思います。

普通ですと、目が見えないとか目が悪いということはハンディであって、絵描きになるというようなことは考えないと思います。目が悪いなら、違う職業に行くべきだと考えるかもしれないのですが、棟方の場合、ただひたすら、絵を描くのが好きだったというそ

れだけのことで、目が悪いということをお自分の中でハンディと全く思っていないわけです。きつとずっと気が付かないというか、気が付かないわけではないけれども、自分の中で目が悪いからどうにもならないとは思わなかったのではないかと思いますのです。

とにかく普通だったら、全体を見てちょっと離れて、構図を決めて、また戻って絵を描いて、というようなふうに思いますでしょ。ところが例えば棟方の板画の作品で一番大きいものは、縦が3m近く、横が片面で13.5m、左右両面合わせると27mにもなりますが、そういう作品を作る時でも、小さい下絵を描いて、それを拡大するなんていうことは一切しませんで、板をたくさん並べておいて、その端から順に、バーッと、ザーッと描いていつて、下絵を仕上げてしまうというような人だったのです。下絵を全部描き終えたら、それを全体で60枚なら60枚、番号を振っておいて、バラバラにして運び、彫って、摺って、最終的に経師屋さんが一面の板画に仕上げる訳です。

離れて少しずつ距離感を測りながら作業するということが全くない人でしたね。そういうところがやっぱり、「天才」というより、感覚的なところで作っている、まるで小さなありんこか何か、大きなものを作ってしまうような感じで、本人がどこまで見えているかわかりませんが、そういう感覚で仕上げることができた人だと思います。確かにそのためにはスピードというものが必要で、自分の中で湧き上がったものをなるべく早く表わしたいというところがあったのではないのでしょうか。

それが映画で出てきた「スピード感」だと思います。そういうとても激しいところが見える人なのですから、一方でゴッホを褒める言葉が出てきましたね。ゴッホを「静かで静かで静かで、たまたま静かな絵描きである」というふうに言っていますね。普通ですとゴッホもやはり狂気の人であるとか、激しい激しい絵描きというふうに言われています。そのゴッホを「静かだ」と表現した人は、珍しいと思いますが、私はあの言葉の中に棟方自身が自分をそういうふうに見て欲しかったという思いをこめているのではないかと思います。

というのが、棟方という人も激しい一面と、とても静の部分を持った人だったからなのです。とても大らかで天衣無縫に見えますが、その実非常に彼は計算をして、非常に考えて作品を作る人でございました。

映画には、第九やねぶた囃子を歌いながら板木を彫るシーンが出てきました。そういうところを見ると「あー棟方さんて本当に楽しそうに板画を彫ったり、絵を描く人だな」という印象が残ると思うのです。けれども、本当のことを言いますとこれは映像のための棟方です。

ある方の言葉に「棟方の中には二人の棟方がある。門番の棟方と本当の棟方だ。」というものがあります。これはどういうことかという、門番の方の棟方が大体人との付き合いもこなすし、非常に器用に作品を作ったりもするのだけれども、本質の棟方というのは奥の奥に居てなかなか出てこないということを指した言葉です。映像の中で棟方はたった一日

の間に、下絵を描いて、彫って、そして摺って、色を付け、作品が一枚出来上がるころまでやっていました。ところがずいぶん後になって気が付いたのですが、この作品はたった一枚しか摺っていないのです。この映画の時しか摺ってなくて、発表はしていない作品です。つまりこれはどういうふうにしたら、板画を彫って、摺って絵が出来るかということをお皆さんに見ていただくための、映画の中のパフォーマンスだったわけですね。要するにこれが、門番の方の棟方の仕事だったということが、映画を見ていて分かるのです。

本当の棟方は画室に人が入ることを極端に嫌っていました。お手伝いさんはもちろん、家族の者もほとんど一切画室には入れてもらえなかったのです。カメラが入る時は全く別です。何から何までやってみせて、歌まで歌います。けれども家で制作中の時の棟方は一切人を側に寄せませんでした。ただ私が小さい頃、今と違って大分おとなしかったものですから、静かに片隅にいる分には許してくれました。そういう時の棟方は、本当に鼻息と、ウッ、ウッという、彫る時の気合の声みたいなものと、それだけの人で、私の耳の中にはショリショリ、ショリショリ、ショリショリ、ショリショリという彫る音と、板木を回すシュッという音、そして鼻息だけが心の中に残っています。

本当に皆さんが一生懸命何かをする時に歌は歌いませんよね。それに板画は刀を使いますから、一步間違えれば怪我をしてしまいます。怪我をしたら次の作品を作るまでによけいな時間が掛かってしまうので、怪我を棟方はとても恐れていました。ですからその真剣さといったら…、歌など歌えないし、鼻歌も出ない、しゃべることも出来ないわけですね。

棟方が板画を作るポイント教えてくれた言葉があります。「刀より前に指を出すな」と、たった一言。「怪我をしたらお終いだから」と常々言っていました。それを考えれば本当に歌なんか歌っていられなかった。だけどそういうふうに、皆さんに見ていただくためにはどうしたら良いかということには非常に心を砕いているわけです。

普通版画は彫るとそれを摺った時に反対になってしまいますから、棟方の場合ですと薄い画仙紙に下絵を書いて、それを裏返しにして板に糊で貼って、それが乾いたら彫って、それを洗い流して板が乾くのを待って、墨をつけ、紙をのせて摺るわけなのですが、映画の中で棟方は板に直接絵を描いていました。それも文字がたくさんあるのに、反対字で書き込んでいましたね。つまり、どうやったら紙を乾かす時間を短縮化できるかということを考え、映像として見ていただけるかということを彼は考えたのだと思います。そういうところが、彼としては人に見せたくはないけれども、実際は非常に考える人でしたね。

この中でも出てきた民芸館の創始者の柳先生は、「棟方の仕事には計算がない」とおっしゃいました。天衣無縫で思いつくままにやったらこういう仕事ができ、と自分自身そういうふうに言いたい人だったのですが、実際のところは非常に努力家で、読書家、勉強家の人だったと思います。

祖父は画室に誰も寄せないのですが、これは仕事をするだけではなくて、実は本を読みたかったのです。ところが家の祖母は特に晩年になってからの祖父は、目が本当には悪い

ものですから、「パパの目は絵を描くためだけのものだから、他の事は一切してはいけない」というふうに規制するわけですね。祖母はとにかく祖父の目を絵を描くことだけに使って欲しい。それで「頼子ちょっと見てきてちょうだい」と言われ、「パパ今ご本を読んでいた」とか、「パパ今お手紙書いてた」とか報告すると、祖母が怒るものですから、余計にまた家の中の者を画室に入れたくないというところがありました。実際本当によく本を読んでいた。棟方の蔵書を整理していますと、たくさんの書き込みがあったり、線を引いたり付箋を貼った跡が残っています。歌集などに付箋を貼っているものがたくさんあるということで、これだけ本を読んでいたのだなということを感じます。

棟方自身は非常にパフォーマンス的に、「あつという間に出来た」とか、「考えないでやってこんなものが出来た」ということが言いたかったのですが、実際にはちょっと違うぞというものの例として、ここに「十大弟子」を持ってきました。ちょっとここで作業をさせていただきます。

「十大弟子」というのは、皆さんどこかで見たことがありますかしら。ご覧になったことがある方手を上げていただけますか。やはり学生さんはあまり見ていらっしやらないですね。わかりました。棟方の代表作で、昭和14年の作品です。海外での色々な展覧会でグランプリを取るようになった一連の作品のひとつでもありますし、本当に棟方の代表作なのですが、これについて棟方はたくさんの言葉を残しています。棟方志功は文字に非常に興味があり、言葉に非常に感化される人なので、自分自身も学長先生がおっしゃられましたように言葉をたくさん残しています。このように饒舌な作家がしゃべってくれるということは研究者にとってはとても便利なことで、その言葉をそのまま信じていれば良いなと思ってしまうわけですね。十大弟子に関しまして、棟方が残している言葉を、読んでみます。

昭和13年に小さな作品をたくさん作りましたが、そのときに「今度は体ぐらいの大きさのものを作りたい」と、思っていたところに、「上野の博物館で興福寺の須菩提(釈迦の十大弟子の一人の像)を見て、十大弟子制作を思い立った」と。昭和14年に「朴の良い板が手に入ったのでこの材料を無駄にしないように、上から下まで全部一杯に使って力のある作品をやりたいかった」という言葉も残っていますね。それからこの釈迦の10人のお弟子さんが「どれが誰で、誰が誰だということが全くわからないで、一つもわからずに作ってしまった。ただ十大弟子の10人の釈迦のお弟子さんの風体をした人間を作って仏に近づきつつある人間の姿を描いただけで、下絵も描かずに板木にぶっつけに描いた」と、言います。「左右の向き合いとか、衣の襞の白と黒の差とか、そういうものを何も考えなかったけれども、ちょうど5人ずつになっている」、と。「それも初めに意識したことではなく、出来上がったものがそうだったということ、人を聞かされてびっくりしました」とまで言っているのですね。「調子が良いというのでしょうか、屏風にしてみたらちょうど5人ずつ内向きと外向きになるのです。思うことが自然と合致したのでしょうか」と言っていますね。「出来上

がってから屏風に仕立てるときに、10人ではまずいということで、両脇に普賢と文殊様とを描きました」と。「それでそれがちょうどそうしてみると10人の弟子が右と左に分かれて、もうとても非常に釈迦の哲理に沿うような、そういう姿になって、自分で考え得ない仕事になりあがりました」というふうに残しています。

たくさんお話を残してくれているので、なるほどそうでしょう、「考えないで作ったところがとてもよい具合」になったんだな、と思います。十大弟子の制作はだいたい1週間、1週間ぐらいでこの12枚の板木を彫ったというふうに言われています。ところがですね、何でこの屏風を持ってきたかという、この屏風は実際はもちろん本物ではありません。私が作ったレプリカなのですが、こっちに出させていただきます。こちらの屏風から板をはがしていきます。板木というのは普通棟方の場合ですと…。表と裏と両方を使い、1枚で2枚の作品を作っていくのです。十大弟子の場合ですと、5枚の板木で10人のお弟子さんを作ることができるわけです。本物の板木ですと、上下がだいたい90cmで、今ここにあるものは縦が80cmくらいですから、だいたい1割減ぐらいの大きさのレプリカになっています。

これがどういうふうな裏と表になっているかというのをちょっとやってみたいと思います。こちらの1枚と、こちらの1枚が裏表になっています。この1枚とこれとが裏表です。



この1枚とこれとが裏表です。これとこれとで裏表です。そしてこれとこれとで裏表です。そうして並べてみたらどうでしょうか。あちらと見比べていただくとお分かりになると思うのですが、棟方は出来上がってみたら、衣の襞の色が黒と白と半分半分だったといっていますが、これは全部衣の襞が黒ですね。その裏にしていきます。そうしますとこういうふうに衣の襞の色が白になって、ようするに板木の裏と表で衣の色が白っぽいものと黒っぽいものが半々になっているわけです。

今度は向きを考えて見ましょう。反対向きになっているもの、同じ方向をむいているもの、真っ直ぐなもの。つまり反対向きになっているものが、2組、同じ向きを向いているもので裏表になっているのが2枚、そして真上を向いているものと真っ直ぐを向いているもので1対になっている。つまり右向きと左向きもこの板木でやっているわけですね。

それから今はちょっと複雑になるので説明しませんが、十大弟子というのは10人のお弟子さんの順番が決まっています、1位から5位、6位から10位、それを裏と表にすることによって、裏と表で1位から10位までの、十大弟子が出来上がっているわけなのです。

棟方はいろいろなことを「やってみたら出来上がった」というふうに言っていますけれども、ここまで出来上がるまでにどれだけ考えたか、考えに考えに考えた結果でなければこんなことは出来ないと思うのです。ただ本当に作品を仕上げるのは1週間、せいぜい10日ぐらいの時間でやったと思います。ただそれまで昭和13年から14年にかけて、約1年以上の時間をかけて、その間ほとんど作品を作らずにただただひたすら手を慣らしていました。最近NHKでやった番組をご覧になった方がいらっしゃいましたらお分かりかもしれませんが、棟方が書いた板下絵が大量に見つかったという話がありました。確かに十大弟子のために、手慣しの絵は本当に山のようにあったようなのです。棟方はそういうものを残すのをとても嫌ったのですが、たまたまそれが残ってしまったのでしょう。形を決めるまで、もうとにかく手を慣らし、手を慣らし、そのために努力をする。それからこういう板木の割り振りを考えるためには、たぶんものすごく考えたのだと思うのです。そこの1年以上の時間をかけて、黙って考えぬいたあげくに、下絵を描いて彫るところは1週間でやった、それが棟方の実像だというふうに考えていただきたいと思います。

棟方はこの十大弟子に関して、本当にそういうような、「考えないでやったらこういうふうに出てきた」というのが自分のミラクルである、奇蹟であると言っているのですが、本当はもう1つこの十大弟子には重大な秘密があります。というのは映画の中でちゃんと聞いていて下さった方はわかると思うのですが、「戦前の板木の全ては戦災で焼けてしまった。焼尽に帰した」というふうに言われていて、十大弟子が映っているときにその話が出ました。ところがなぜか十大弟子が残っていますね、こうやって。最近の展覧会の中でも一番の中心になっています。

それはなぜかといいますと、昭和20年になって棟方は東京からこの石川県の隣の富山県の福光というところに疎開をするのです。その時に棟方自身は、福光に疎開することが決まると、自分の身1つで来てしまって、妻子の方は後になる。子供達が行って、それから祖母が1人残って家の家財道具を荷造りしては送っていたわけですね。きっと若い方には想像もつかないと思うのですが、戦争の頃はいくら荷造りをして届けてもそれを電車に載せてもらえない状態で、山程の荷物が駅留めになっていたそうです。そういう荷物の中のたった一つだけが福光にやっと送られてきて、その中に、この十大弟子の板木が入っていた。それも十大弟子の板木としてではなく、棟方のとっても大切にしていたイギリスの木の椅子があるのです。ウィンザーチェアという。その椅子を梱包するのに、さっきも言いましたように、十大弟子の板木は高さが90cmで、それから朴の一枚板はとても良い板なので、祖母が椅子の梱包材として周りに使ったのが、十大弟子の板木5枚だったのです。その荷物だけが福光まで行って、後のものは5月25日の大空襲で焼けてしまったわけなのです。奇跡的にその板木が残ったということが、それから先の棟方にとってどれだけのものだったかと思うと、何か震える思いがします。十大弟子は昭和14年の作品ですが、5枚だけが板木が残りました。両はじの普賢と文殊菩薩は板木がその仲間に入りませんでし

た。それで棟方は仕方なく昭和23年に普賢・文殊だけ作り直しています。

これは昭和14年の段階の普賢菩薩と文殊菩薩です。昭和23年のものがこれです。明らかに調子が違いますでしょ。これがもしも十大弟子の中の1枚が焼けて、普賢・文殊が残っていたならば、昭和23年には、10の人タッチが揃わない十大弟子になってしまったわけなのです。10人分の板木が残って、普賢・文殊が焼けてしまったということ、そのために普賢・文殊だけを作れば新しい「二菩薩十大弟子」が出来たということこそが、棟方の奇蹟の一つではないだろうかというふうに私は思っています。

本当の奇蹟というのはそういうところにあるのではないかと思います。こんなふうに棟方は自分の努力の跡というのをなるべく見せたくない人だったのですけれども、本当に天才というだけでは、若い方達にとって「それでは私には何も関係ないわ」ということになってしまうと思うのです。けれども、十大弟子ひとつをとっても、それだけの努力をした人ということをつけ加えると、やはりそういう努力というのはこれから先に皆何かの役に立つことではないかなというふうに私は思っています。努力をして手を動かして動かして体に覚えこませた後のスピードであり瞬発力であり力であるということ、これを覚えておいていただきたいと思います。

後少し時間があるところで、棟方の作品を見ていただく時のポイントになることを一つ加えさせていただきたいと思います。

ひとつ目は、映画の中でも出てきました裏彩色というのはどういうものであるかということを見ていただくために、作品を一つ持ってまいりました。これが表側です。棟方はもともとは大変多色刷りの板画なども作っていたのですけれども、すぐにその技法を捨ててしまって、白黒だけの板画を作るようになりました。ただそのうちに色が欲しくなって、最初は板画の表面から色をつけました。そうすると板木の面が消えてしまうわけですね。それを柳先生のご助言で、裏側から色をつけるようにしてみました。これ裏側です。ちょっとわかりにくいですが、裏側から色をつけたことによって、表に返した時に染み出るような効果になるという、こういう技法を使っています。本物の作品で見ていただいた方が良かな。こんなふうに裏面はなっています。後でもし良かったらこちらでご覧になってください。そんな技法を使っているということを持ってまいりました。

それから作品を見ていただくときのポイントとして、一番大切なことは、棟方の作品には非常に数が多いもの、それから大きなものがたくさんあります。棟方自身はとても目が近いから画面から10cm～20cm位の距離で絵を描いていますけれども、皆さんには必ずうんと離れて見ていただきたい。離れて見たときに全体像を見ていただく、あるいは屏風になった、屏風の中での構図をみていただきたいと思います。そうしますと多くの場合屏風は向かい合わせになるとか、白黒になっていてそれが市松模様になるとか、そういう構図になっていますし、あるいは真ん中に仏様があって、それを囲んで曼荼羅マンダラのような形になっていますから、そういう形で一旦引いて遠くから見たいと思います。

それからその次に、右から左の流れで見ていただきたいということ。枚数の多い作品の場合、右から左に見ていただくことは確かなのです。なぜかという棟方は言葉でもっていろいろなイメージが湧いて、言葉を取り込んだ作品がたくさんありますから、日本の文字の流れとして右から左で見ていただきたい。それから1枚の作品でも、例えば4人の女の人がここにいますね。右から順に良く見ますと、地模様には桜があり、桔梗があり、紅葉があり、それからお星様—棟方にとってお星様というのは北極星、自分が生れた青森を示す北のシンボルなのです。こういうもので4人の女性が4つの季節を表わしていることが往々にしてございます。12人の女の人がいれば、まずはそれが12ヶ月と考えて良いでしょう。それから12枚の組板画があったときに何か花模様があったならば、それがだいたい12ヶ月になっているというふうに考えていただいて良いと思います。ですからどの場合も右から左で必ず見ていただきたい。展覧会場によっては左からの流れになっていることが最近が多いですけども、もしこれから先棟方の作品を展覧会で見るものがあつたら、必ず右から左で見てください。

それから地模様のことを先程ちょっと言いましたが、ここに4匹の馬がいますね。そしてその馬に何か細かい模様が描かれています。それが何かということをプリントの方にも書いていますが、良く見るとそれが青龍、白虎、朱雀、玄武という中国の4つの神様であるということが多いのです。ですから地模様をよく見ていただいて、龍の鱗であるとか、虎のこういうポチポチ、それから朱雀という朱雀と書きますけれども、鳳凰みたいな鳥ですね、この鳥の羽、それから玄武の亀甲ですね。亀の甲羅の模様、それがどこかにないかなというのを見ていただくと、それが4つの神様、4つの季節、それから4つの方向、東西南北であり、春夏秋冬であるということを表わしているというのが見えてくると思うのです。ですから地模様を読むこと、こういう青龍、白虎、朱雀、玄武みたいなものを読み取ることで、棟方の作品がグーンと身近になるのではないかなと思います。

また、ここにある鳥、これは3本足の鳥が太陽に住むという伝説で、この八咫鳥が太陽のシンボル。それとよく月のシンボルとして兎が描かれて、太陽と月、それから他によくあるのは鳥と魚でもって乾坤^{けんこん}というか、天と地というような表わし方をするような棟方の世界観というものがございます。

そういうものを心に入れて1つの作品でも、組みになった作品でも見ていただくと、これから先ちょっと楽しいのではないかなということを付け加えさせていただきまして、今日の話を終えさせていただきたいと思います。

最後になりますけれども、棟方は富山県に疎開していたことから、富山との繋がりが非常に深く、そのためにいろいろな展覧会なども、富山ではやるけれども石川県ではやらないというふうに、どうしても隣接しているためにちょっと遠い存在になっている部分があつたのですね。それが今回このような形で金沢という文化の中心地で話をさせていただくことができたこと、これから繋がりが持てるということを本当にうれしく思いまして、

話を終えさせていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

(司会) ありがとうございます。この講演会はすでに7回開かれています、こんなにたくさんの外部の方がお見えになったのは初めてだと思います。その方たちから、また学生の皆さんから石井頼子さんの方に質問がありましたら是非挙手をお願いします。

(質問) あのエネルギーはどこから生まれるのかなと思うのですが、どのようなものが好きだったのでしょうか。

(石井) まず最初に申し上げておきたいのは、まるでものすごいお酒が好きそうに見えませんか。ところが彼はほとんど飲めません。ビールがコップに1/3ぐらいですっかり酔っ払ってしまうのですね。ですから宴席でビールをちょっとだけ飲むと、その席で一番酔っ払った人になってしまう人でした。ですからまずお酒がエネルギーではなかったことだけは確かです。一番好きだったのはしょっぱい塩鮭とか、青森の食べ物ですね。だけど、皆さん棟方志功さんの朝ご飯は何だったと思いますか。彼はアメリカに行ってからすっかりアメリカにかぶれてしまったところがあるのですけれども、朝はグラハムブレッドに蜂蜜をつけて、野菜ジュースの中にその頃ちょっとめずらしかったオリーブオイルをたらして、そしてスクランブルエッグを召し上がっていました。そういう人で、あと一番好きだったのが抹茶でしょうかね。お茶がやはり大好きで、こちらの金沢のお菓子もよくいただいておりました。ところで、映画を見ていらしてああいう人がおじいちゃんだったらどんな感じだと思いますか皆さん。実際の棟方は歩いているだけであれだけおかしいのですよね。説明がつかないのですけれども、芝生の上を歩いているあの姿を見るだけで、なんだか私は笑ってしまうのですけれども、あれが私のおじいちゃんです。

(司会) その他どなたか質問ございますか。

(質問) 棟方志功は下絵を書いてから、板画を始めたのでしょうか。

(石井) ほとんどがやはり下絵は描いています。というのはやはり文字の多いものなどは間違いがあつてはいけないということで、かなり厳しくやっています。点や丸や行間まで気をつけて、人の作品ですとかかなり几帳面にやっていますね。それから、細かい女性の姿などもやはり下絵を描きますが、大きな作品であるとか、組になった大きな作品の場合ですと、直接に反対の構図で描いていきます。

特殊な例として運命頌という作品がありますけれども、これは大原美術館の大原さんのところですが、そこから頼まれて、その「社運を掛ける」ということを表現するのに、いきなり板木に真っ黒に墨をつけてしまって、そこに直に反対^{じか}彫でニーチェの「ツァラトゥス

トゥラはかく語りき」前文を全部描きこんだという作品などもあります。これは自分を究極のところに追い込めて、そういう作り方をしたかったという1つのパフォーマンスかと思うのですが、そういう作品もご紹介します。

でも大抵の絵ではやはり下絵を描いて、それを裏返しにして描くことが多かったんです。

(質問) 棟方志功の絵には、特定のモデルのような方がいらっしやったのでしょうか。

(石井) 実は全国津々浦々に私は棟方志功の絵のモデルだという女性がいらっしやいます。イメージの中では津軽美人というか、実際にモデルさんの姿は見えないので、写真で見ることがありましたが、自分のイメージの中の女性という、やはりうちの祖母なのではないかと思いますね。よろしいでしょうか。

皆さん朝から長いこと学生さん、お疲れ様でございます。もう少し頑張ってください。

(司会) 学生の方から何かありますか。皆さん資格を取ろうということで、仕事のためにということですが、学芸員ということでどうしたらよいかというようなお話をちょっとしていただきましょうか。

(石井) 学芸員はやはり学芸員資格を取れる学校にいらっしやるのが一番早いでしょうね。私はちょうどたまたま行っていた大学にそのコースがあったものですから取りましたけれども。かなりたくさんの単位をとらなければいけません。

(司会) よろしいでしょうか。私の最後の感想ですが、棟方志功という人は、狂っているとか、おかしいとか言われているのですが、先ほどのビデオで、ゴッホの絵を見ながら、「静かで静かでたまらなく静かだ」というようなセリフをはく、あれがもう一面の棟方だと思います。人間の中にやはりそういうふうに非常に狂気な面と、本当に普通の面とが混ざっているということが人間なのだなというふうに思いました。ですからこの人は異常だというふうに切ってはいけないのだなと改めて感じました。それでは、皆さんの質問がないようですので、今日はこれで終りにいたします。